

福原五岳筆 《蝦蟇仙人図》（関西大学図書館蔵）

カラヴァアエヴァ・ユリヤ
Karavajeva Julija

はじめに

備後尾道出身の福原五岳（一七三〇—一七九九、享保一五年—寛政一年）は、池大雅の高弟と呼ばれており、人物図に優れた大坂画壇の画家として知られている。なお、五岳は大雅のように注目されなかったが、五岳の人物描写には才能が見られ、数多くの遺品が残されている。関西大学図書館には五岳の絵画が四点所蔵されているが、それらはすべて人物図である。とりわけ《蝦蟇仙人図》【図1-2】が興味深い。すなわち、暈した色彩と長崎派に近い装飾的な形象は、他の四点の五岳の掛幅には見られない特徴である。

《蝦蟇仙人図》をめぐって

さて、《蝦蟇仙人図》の寸法は、縦一二〇・〇×横五三・五cmで、材質は絹本着色である。画面の前景に仙人の姿とその肩の上に座る蝦蟇が描かれ、後ろに竹と岩石、そして湖畔の風景が見られる。右下には「五岳」の墨書による署名があり、「玉峰山人」と「福原素子絢印」という二顆の白文方印が捺されている【図3】。左上の部分には篠崎三島による七言絶句の賛が揮毫されている【図4】。つまり、「夏巢冬穴足安身富貴何須錦



【図1-2】福原五岳筆《蝦蟇仙人図》、絹本着色、120.0×53.5cm、江戸時代（18世紀）、関西大学図書館蔵。

綉新豫且無由施密細蝦 蟇群裡有斯人 三島応道題」という墨書と、それに続く「三島漁」（白文方印）と「篠応道印」（白文方印）【図5】である。左上冒頭には「中聖人」（朱文円印）【図6】が捺されている。制作年代は記されていない。

そして、図と賛、そして落款から、この作品は福原五岳の絵画に篠崎三島が着賛したものである。五岳は、社会的で活発な人柄であったらしく、大坂画壇において積極的な役割を果たしている。つまり彼は、人の繋がりを大事しながら、文人画的交流、特に合作のような活動を楽しん



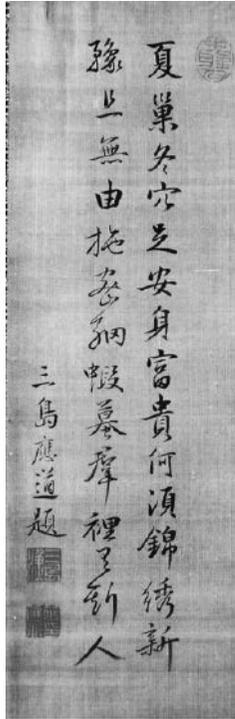
【図3】福原五岳筆《蝦蟇仙人図》落款



【図5】福原五岳筆《蝦蟇仙人図》、篠崎三島の印章



【図6】福原五岳筆《蝦蟇仙人図》、印章



【図4】福原五岳筆《蝦蟇仙人図》、篠崎三島賛

だ。また、大坂の儒者で文化人の篠崎三島と交わるようになった。篠崎三島は、大坂の町人学者として紙屋の家業を継ぎながら、天文、易学、音曲、詩文を学びつつ、幅広い分野に興味を抱いた。三島は《蝦蟇仙人図》のために賛を作った。篠崎の書体は、かなり鋭い形象の文字を含んでいるため、文字のそばの竹の葉にみられる尖った形、そして、仙人の

服装を描き出す明瞭な輪郭線とよく釣り合っていると考えられる。

さて、五岳の図様、特にぼさぼさ頭をして裸足で立つ仙人と、その肩に乗る蝦蟇を検討すれば、画家は《蝦蟇仙人図》という有名な画題を描いたことが判明する。すなわち、蝦蟇仙人は、中国の葛玄、もしくは劉海蟾をモデルにした仙人であり、昔から中国の絵画によって描かれてきた。しかし、蝦蟇仙人の図様は、中国から日本に入った時、様々に変化されたため、日本の絵画においては、その図様や描写法はばらばらになってしまったといつてよい。なお、蝦蟇仙人の画題、特にその図様の変遷については、張小銅が最も詳しい論文を発表している。張小銅によれば、「中国における『劉海+蟾』は宋代よりすでに年画や提燈画に定着しており、その構図は劉海が糸で繋がっている銭をもって、三足の蟾蜍を弄んでいるパターンとなっていた。一方、日本における「劉海+蟾」

は劉海蟾の構図であり、裸足で、ぼさぼさの頭、にこにこ笑っている姿であり、肩や頭に一匹の蝦蟇というパターンとなっている。劉海が糸で繫がっている銭をもっている構図は見られない。その構図は宋・元以後の文人画の影響も考えられる^①。

なお、五岳の図の場合、描かれた仙人は、ぼさぼさの頭で裸足である。そして彼は、にこにこしながら肩の上に蝦蟇を載せている。しかし、この蝦蟇は、三足の形態ではなく、二足の形態で示されている。加えて、劉海が糸で繫がる銭を持つという図案も見られない。従って五岳の図は、張小鋼の解説によれば、宋・元以後の文人画の影響を受けた構図だといえるであろう。そうすると彼は、何らかの中国の原本に基づいてこの絵画を描いた可能性が高い。つまり五岳は、好奇心の強い画家であって、様々な手法を研修した上で、中国絵画と文人画も習ったことがあるに違いない。しかし、《蝦蟇仙人図》を描くために、どのような原本を用いたかは明らかではない。すなわち、京阪地方において所蔵されている蝦蟇仙人図では、京都知恩寺にある顔輝筆《蝦蟇仙人図》【図7】が有名であるが、この元時代の絵画に見られる構図は、五岳の作品とは異なっており、三足の蝦蟇と仙桃を手を持つ仙人を伴っている。また、五岳と顔輝の仙人が着ている異装も異なっており、五岳の場合は長いズボン状の衣服を見ることはできない。なお、五岳の構図はなかなか独創的である。つまり、五岳の仙人は、不自然的に頭を曲げて、後方を見やっている。蝦蟇も同じ右上方に視線を向けている。頭を傾げて後ろを見つめる仙人は、日本の蝦蟇仙人図の絵画ではかなり珍しい。そうすると、この構図は五岳独自の解釈ではなからうか。加えて、仙人と蝦蟇が見やる対象は、画



【図7】顔輝筆《蝦蟇仙人図》、絹本著色、161.3×79.7cm、元時代（14世紀）、京都知恩寺蔵（重要文化財）

面の外にあるため、鑑賞者は、隠されたものを想像することになり、何か神秘的な雰囲気を感じることになる。

さらに、五岳の視覚言語において幾つかの注目すべき重要な箇所がある。たとえば、画面全体に施された色彩は暈されている。墨の深さをうまく使って、五岳は淡い著色の画面を作り上げたが、そこには、青竹の色で描かれた鮮やかな帯が目立つ。加えて、仙人の身体とその暖色系の色彩は、涼しく感じられる背景と、服装の色彩によっても対照的に際立っている。淡い墨で描かれた湖畔は遠景へと消えゆくようであるが、右側の岩石は、五岳風の荒々しい筆致で断固とした形象となっている。つまり、この画面には筆致のさまざまな変化が見られ、画家は多様な表現を目指したものと理解できる。また、仙人の衣装の襷には淡白な陰影がつけられ、鑑賞者はその動きと立体感を感じとることができるだろう【図

【8】。そして、仙人と蝦蟇の形象に見られる造形はかなり異なっている。つまり、白い線で描かれた蝦蟇は、消えるような透明感を示している【図9】。一方、仙人の姿は、立体的で即物的な格好に見える【図10】。従って五岳は、有名な中国の画題を選びつつ、そのキャラクターの配置において、一種の遊びを試みていたのではなからうか。言い換えれば、形体の濃い塗り方と透明感、それぞれの姿の独自の配置、冷たい色彩と鮮烈な形態の重点化は、蝦蟇仙人の存在が、藝術的道具と化していると考えられる。加えて、仙人の頭とその不自然的な動作は、彼の超自然的な能力を含蓄しているようでもある。しかし、仙人の形態とその形象化において五岳は、写実を目指していなかったようである。つまり五岳は、佐竹曙山の《蝦蟇仙人図》【図11】に見られる解剖学的な表現にまでは進まなかったわけである。



【図8】福原五岳筆《蝦蟇仙人図》(部分)



【図9】福原五岳筆《蝦蟇仙人図》(部分)



【図11】佐竹曙山筆《蝦蟇仙人図》、江戸時代(18世紀)、個人蔵。



【図10】福原五岳筆《蝦蟇仙人図》(部分)

おわりに

要するに《蝦蟇仙人図》は、関西大学図書館に所蔵されている五岳の遺品の中でも特色のある絵画であり、構図の均衡、そして、仙人と蝦蟇の形象化においては、一瞥で興味を掻き立てる佳品であると思われる。すなわち、仙人の姿には、写生の要素を示すとともに、異様な雰囲気を組み合わせた顔貌が見られ、蝦蟇の形姿は透明で形態を押さえたものにされている。さらに五岳は、中国の画題を扱って、仙人が後方を振り向きながら、何かを凝視しているかのような独自の構図を創造し、色彩においても、濃淡によって暈された鮮やかなアクセントを採用している、要するに、ここで用いられた対照的な視覚言語は、蝦蟇仙人の画題にふさわしい神秘的な雰囲気を生み出している、ということができようであろう。

【主要参考文献】

- 内山淳一「秋田蘭画の人物表現——「蝦蟇仙人図」と「児童愛犬図」をめぐって」、MUSEUM、東京国立博物館美誌、第五一三号、東京、美術出版社、一九九三年二月、二〇一―三五頁。
- 神山登「福原五岳の人と作品」、『日本美術工藝』、東京、日本美術工藝社、一九八〇年九月、二四―三三頁。
- 施燕「福春五岳筆《寒山拾得図》（関西大学図書館蔵）」、『関西大学博物館紀要』、第二一号、吹田、関西大学博物館、二〇一五年三月、六二―六八頁。

張小銅「蝦蟇仙人考」、金城学院大学論集、人文科学編、第一〇巻第一号、名古屋、金城学院大学、二〇一三年三月、四六―五六頁。

松下英磨「池大雅」、東京、春秋社、一九六七年、三〇〇―三〇三頁。

〈図版出典〉

- 【図1-2】 福原五岳筆《蝦蟇仙人図》、江戸時代（一八世紀）、関西大学図書館蔵（執筆者の個人撮影）。
- 【図3】 福原五岳筆《蝦蟇仙人図》、福原五岳の落款（執筆者の個人撮影）。
- 【図4】 福原五岳筆《蝦蟇仙人図》、篠崎三島の賛（執筆者の個人撮影）。
- 【図5】 福原五岳筆《蝦蟇仙人図》、篠崎三島の印（執筆者の個人撮影）。
- 【図6】 福原五岳筆《蝦蟇仙人図》、印（執筆者の個人撮影）。
- 【図7】 顔輝筆《蝦蟇仙人図》、元時代（一四世紀）、京都知恩寺蔵（内山淳一「秋田蘭画の人物表現——「蝦蟇仙人図」と「児童愛犬図」をめぐって」、MUSEUM、東京国立博物館美誌、第五一三号、東京、美術出版社、一九九三年より転載）。
- 【図8】 福原五岳筆《蝦蟇仙人図》、部分（執筆者の個人撮影）。
- 【図9】 福原五岳筆《蝦蟇仙人図》、部分（執筆者の個人撮影）。
- 【図10】 福原五岳筆《蝦蟇仙人図》、部分（執筆者の個人撮影）。
- 【図11】 佐竹曙山筆《蝦蟇仙人図》、江戸時代（一八世紀）、個人蔵（内山淳一「秋田蘭画の人物表現——「蝦蟇仙人図」と「児童愛犬図」をめぐって」、MUSEUM、東京国立博物館美誌、第五一三号、東京、美術出版社、一九九三年より転載）。

注

- ① 張小鋼「蝦蟇仙人考」金城学院大学論集 人文科学編 第一〇卷第一号、名古屋、金城学院大学、二〇一三年三月、五四頁。
- ② 佐竹曙山の《蝦蟇仙人図》、特に秋田蘭画の人物表現と解剖書との関係について内山淳一が詳しい論文を発表したことがある。内山淳一「秋田蘭画の人物表現——「蝦蟇仙人図」と「児童愛犬図」をめぐって」、MUSEUM、東京国立博物館美誌、第五一三号、東京、美術出版社、一九九三年二月、二〇一三五頁。